



「知的障害者」として生きることを何故選んだのか ある青年の「語り」から

| | |
|----------|---|
| 著者 | 深谷 美枝 |
| 雑誌名 | 明治学院大学社会学・社会福祉学研究 = The Meiji Gakuin sociology and social welfare review |
| 巻 | 149 |
| ページ | 221-242 |
| 発行年 | 2018-02-28 |
| その他のタイトル | Why Did He Choose to Live as the Mentally Handicapped A Narrative |
| URL | http://hdl.handle.net/10723/00003324 |

【研究ノート】

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

——ある青年の「語り」から——

深谷美枝

1 中村君との出会い

筆者が中村隆君(仮名)と出会ったのは、津久井やまゆり園事件に触発されて施設内虐待に再び関心を抱いたことがきっかけである。ある時懇意にしている知的障害者のグループホーム施設長Aさんから「自分の福祉施設や機関での経験を是非語りたいという当事者がいる」という連絡を受けた。それが中村君である。中村君は自分の物語を語ることによって意味を再構築する「ナラティブアプローチ」的支援⁽¹⁾を受けている最中であり、目下、同グループホームでの各種実習や教育機関での授業で進んで体験を語っているようだった。

時間を置かずに現場に赴き、信頼関係を構築しながら5回に渡り十数時間の面談を重ねていくことになった。中村君は19歳、「軽度知的障害」とされている青年である。しかし、彼は言葉遣いも丁寧で語彙や表現力に優れ、趣味や興味関心も広く、社会的なスキルも高い。一般大学生とさして変わらない知的能力を感じさせられた。コミュニケーション面でも発達障害の傾向も感じられない。

一体何故、そんな彼が「知的障害」とされて生きているのか。それが初対面から筆者の大きな疑問となった。面接を重ねるうちに彼がそのラベルをかつて自ら選び、また現在も意志的にアイデンティティとして選び続けていることが分かって来た。

彼は両親からの虐待により、3歳で児童養護施設ひかり学園(仮名)に入所、

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

16歳まで同園で育った。中学までは普通学級で過ごし、高校の時自らの意志で特別支援学校高等部に進学する。16歳の時ひかり学園から逃亡し、児童相談所に保護され、施設側の再三の説得にも応じることなく、一時保護所で1年間生活した。17歳から里親加藤さん(仮名)の家庭で1年間生活する。18歳で特別支援学校卒業と同時に里親加藤さんの勤務する現在のグループホームでの生活を始める。学校からの紹介で大手の外食産業チェーン「うめや」(仮名)の特例子会社で働き始めるも、パワハラから1年で適応障害の診断を受け退社、生活保護を受給開始する。現在就労支援センターの支援を受けながら、就職を含めて進路を模索中。傍ら子ども食堂でボランティアをしながらリハビリに努めている。

2 本論の方法

本論では彼の語りのうち、3歳からの児童養護施設の体験と、その中で特別支援学校高等部に進学を決めるまでの15年間についての「語り」を取り上げる。面接は非構造面接で自由に語って貰った。ただし、面接場面には5回のうち数回はグループホームの施設長Aさんが立ち会っていて、本論の分析対象となる初回、第2回のうち初回は立ち会いがあって会話にも登場している。そのことも含めて本インタビューは、冒頭に記したようなグループホームにおける支援構造から自由ではないことを記しておきたい⁽²⁾。面接は逐語記録として起こされ、時系列に従って中村君の「語り」として整理された。

本論の視点として述べて置きたいのは、①当事者である中村君は一見個人である中村君を指しているように見えながら、実は中村君を取り囲む状況や環境性をも含む存在であること、②中村君の語る社会的現実はいくまでも彼にとっての現実であり、必ずしも客観的な「真実」とは限らないし、真偽を超えたところに中村君の真が見えてくること⁽³⁾、③福祉施設や機関は利用者と職員の間での語りの出会う場である、ということである。

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

当事者である中村君は、グループホームの支援の中で児童養護施設での経験を言語化しているのであって、「語り」はすでに彼の「物語」とグループホームの支援の持つ「物語」との出会いの中で生まれつつあるものである。

3 中村君の「語り」から

(1) 児童養護施設

3歳で両親による虐待により保護され、児童養護施設ひかり学園に入った。一番長い在園児だった。当初大舎制で小学校3、4年生位の時に小舎制のユニットケアに移行した。施設的环境自体は当時習い事が出来なかったり、門限が6時と早すぎて不自由だったものの、全般に悪くはなかった、と中村君はいう。食事もおいしかったし、それなりに行事も楽しかった。年下の子どもたちも時にうるさく感じられることはあったけれども、可愛くて好きだった。子どもたち同士の関係は概して良好だったようだ⁽⁴⁾。

(2) 職員に対する見方

しかし、職員に対する見方は、中村君は否定的だ。職員がとにかく嫌いだった、他の子どもたちも皆同じように職員を嫌っていた、という。

会話1

F 本当に職員キライだったんだね。

N 大っ嫌いでしたね。嫌いでした。

F 職員でいい人だなと思ったひとはいなかったの。

N いないです。あそこほど人を嫌いになるところはないと思います。他の子どもも話しますが、俺、小さい子から好かれてたんで相談受けたりしたんですけど、あの部屋のあの職員いやだって。本当に小学生でも消えていいと思うあ

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

の人と、そこまでいっちゃうんです。いてもいなくても変わらないでしょ、あの
人って。

会話2

N えこひいきはいやですよ。あと私はあなたのこと分かってます、みたいな
態度。

鼻につくどころじゃなくて、本当に包丁持ちだして刺してやろうかと思う
位いらいらして、したかぶりされるのにいらいらして。本当にいらいらし
て、何こいつ、分かってもないくせに人のこととやかく言ってんじゃねえ
よ、みたいな。他の子と話しても同じことをいいますよ。とにかく嫌いになっ
て行動がむかつくんですよ。一緒の空気吸うなみたいな。

会話3

F 本当に職員とぶつかっていたというか、好きじゃなかった?

N 好けなかったですね。努力はしましたけど。無理ですね。

F N君から見た職員で、どんな存在なの?という人たち。

N はあー。(あまりにも言いたいことがありすぎて言葉にならない様子)都合の
いい人たち。

職員に対して消えてもいいと思う、一緒の空気を吸いたくないというような
最大限の否定の言葉が並ぶ。えこひいきや、あなたのことは分かっています、
というような知ったかぶりの態度が我慢できないものとして感じられていた。
そして都合のいい人たち、という信用がおけないというニュアンスの表現がな
される。

その中でも新しい職員は子供たちと向き合おうとする姿勢を持っていた。し
かし、その職員たちも辞めるか、あるいは古い職員の指導に従うようになって

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

いくという。

N あとは職員間のあれがよくなかったですよね。新しい職員が来ると、その職員は入ったばかりなんで、凄くいい人なんです。凄くいい人なんで。

F 大体ね。利用者さんと向き合おうとする職員なんだよね。

N だからすごく仲良くなるんですけどね。でもお前甘やかしすぎだぞ、みたいな感じになったりして。

F 利用者さんと距離取るんだよね。

N 距離とるんですけど、耐えられなくて辞めちゃう人もいて、自分がいた中では3カ月でやめたりとか。1年もてばいいほうじゃないの、みたいな感じでしたね。結構コロコロ職員も変わるし。

質問者は重ねて職員について尋ねていくが、いい印象が全く出てこない。

F もうちょっと職員だって子供に好かれるキャラクターの人のいたっていいような気がするんだけど、そんなに不作だった？

N 子どもに好かれようとして何かをするんだけど、その後の生活で嫌われて行く。スポーツ教室して遊んで株を取り戻そうとするんですけど、その後基に戻る。

F 開放区があって近づくように思うんだけど、その後の生活で下がるんだ。

N 急激に下がりますね。最低なのでちょっと上がって下がるみたいな。こっちも急激に期待してないみたいな。他の子たちも今日楽しかったね、職員がいなければね、みたいな。嫌いじゃない職員もいたんですが、他の部屋の職員ですよね。自分の部屋の担当になった途端に、ダメになる。嫌いになります。結局この人も同じ考えか、みたいな。

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

スポーツ教室のような無礼講の、開放区を作って子どもたちと触れ合い、信頼関係を取り戻そうとするものの、それは一時的なことで持続的な効果はなく、嫌いではない程度の職員もいたが、担当になった途端に嫌いになってしまう。中村君から見た時に職員は持続的な信頼関係を結べるような相手ではなく、嫌悪と拒否の対象でしかなかった。

中村君と職員の間、あるいは中村君から見た子どもたちとの間の根源的な裂け目は、E.ゴッフマンの描いた職員と「被收容者」の世界を彷彿とさせる。職員と「被收容者」の間には根源的な裂け目があり、それぞれのグループは相手を非好意的に捉える傾向があるとされている⁽⁵⁾。

(3) イライラ から「反抗期」へ

中村君は職員に対して一貫して「イライラ」を感じて来た。小学生の時には「ノーテンキ」であり、暴れることもなく穏やかであった。しかし、本人によれば小学生の時から積もり積もったものが、中学生の頃から色々な事件を通して「反抗期」として噴出したという。

① イライラのはじまり

イライラのはじまりは「卓球事件」であった。卓球台が2台あって職員は1人。1台につききりであった職員がもう1台でプレーしていた中村君を叱責したという。不条理な叱責をされて中村君は弁解できずに諦めて飲みこんでしまった。

F 一番初めにイライラした記憶って何？ たぶんいろいろあるだろうけど。

N 小学生の時に卓球大会の時に職員が1人しかついてなくて台が2つあって、職員のお気に入りの子がいて何の指示も貰えず、勝手にやったらお前何勝手にやっただよ、みたいに怒られてその時が一番いらいました。そこがめっちゃ残ってます。

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

F こないだから聞いてると職員からの誤解というか、意味が分かってもらってなくて誤解されてる場面が多いよね。

N そうですね。自分も妥協しちゃうタイプなので。言っても意味がない、わかんないからもういいや、みたいな、感じて諦めて、怒られっぱなしみたいな。場面として卓球大会の時に好きな子に職員がつききりだったから、1人でやってたら、何でお前勝手にやってるんだみたいに言われてしまったと。その時に意味を説明するのではなくて、飲みこんじゃった、飲みこまざるを得なくなっちゃった。小学生だったんで言い返すっていう事もなかったし、職員に対して怖いっていうのがすごくあったんで、全然言い返せなくて。

支援者側の一方的な決めつけに対し、中村君は上手く言語化して伝えることが出来ず、意味づけを圧殺されてしまった事件である。その経験がダメージとなり、中村君のイライラの端緒として記憶された。支援者の側からすれば日常の中の些細な行き違いに過ぎないことなのに違いない。ここに中村君と支援者の温度差がある。

② 募るイライラ 学業を巡って

中村君にとって職員はとにかくストレス、いらいらする種であったが、一番のポイントは学業のことであった。彼は小学生時代、普通に90点とかを取るくらいの、まあまあ成績であったという。しかし、日常的に勉強しなさいと言いつづけられて本当にそのことに「イライラ」し続けた。人と比べられることも嫌だった。中村君はそういわれるほど反抗し、勉強しなかったという。中学1年の終わりころから提出物は出さず、テスト中に寝てほとんど手を着けず白紙で提出するようになり、成績もガタ落ちになっていった。

N 勉強しろっていうのがしつこくて、なんか勉強してたし、問題もなかったし、

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

それなのに勉強しろって言われたりとか。確かに自主的に勉強するわけではなかったんですけど、そこでダメでしたね。勉強しなさいと言われた時点で、いらっとして。職員を好けるような状態じゃなかったんで、自分の嫌いな性格上嫌いになった人はとことん嫌いになる性格なんで、そこで威圧的なしゃべり方でやっぱり、はあ?みたいな。勉強とかほかの子がよく出来てると比べたがるのが人なんで、職員が人によって態度違うんで、差別的な感じがすごく嫌で。

(中略)

F 物凄いストレスになっちゃってるのはひとえに職員との関係?

N そうですね。職員の言う通りにしなくなかった。職員のいう事=勉強しなさい、で、じゃ勉強しなさい、みたいな。すごい天邪鬼だったんでなんでもかんでも反対にしてて。

(中略)

N 反抗期に入っちゃってからはあまり成績が良くなかったんですよ。中学は行った時は勉強に意欲があって理解もしてたし、分かりやすかった。自分としては教科書見てれば分かった。反抗期入ってからはテスト中とか爆睡でしたよね。提出物も出さなくて成績もガンガン落ちて。

職員サイドからすれば支援の一環としての日常的な「声掛け」であったに違いない。しかし中村君からすれば威圧的になされる日常的な強制であり、一種の精神的虐待に近いものであった。それにストライキを起こし、勉強しないという方法によって彼は抵抗し続けたのである。

③ 中学1年生後半の2つの事件

勉強をしなさい、というイライラする刺激の他に、傷つけられる出来事が日常的に多くあったという。その中でも大きな事件として2つの事件が語られる。

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

A 「もみじまんじゅう事件」盗みの疑いをかけられて

何か事件が起きた時犯人を探索する犯人探しがなされる。無実であるけれども彼はその反抗的な態度からよく嫌疑をかけられた。物が盗まれたり、小さい子どもを泣かせたりした時に疑いをかけられた。事情を説明しても理解してもらえないことはなかった、という。その1つに「もみじまんじゅう事件」があった。

職員で甘いものが好きな人がいて、私のもみじまんじゅうを知らないかって言われて、はじめはみんなに聞いてたんですけど、そのあとに俺個室に呼ばれて取ったんじゃないの？ みたいなの。自分取っていないし、その時犯人は自分から名乗り出て解決したんですけど、詫びのひとつもしないし、おかしくないかって。何にもしてないし、私を疑ってきて犯人扱いしたくせに謝りもしない。人に謝っていうくせに自分は謝らないのかみたいな。

物を取った嫌疑をかけられることは非常にプライドを傷つけられる経験である。しかし、中村君はその嫌疑を晴らすだけの言語化が上手くできなかった。無力感を体験させられたであろう。しかし、嫌疑が晴れても、職員から謝罪を受けることはなかった。この事件について彼は職員の八つ当たり、と意味づけている。そのような八つ当たりはよくあることであった。職員の側からすればこれも日常の些細な出来事であつたらう。

B 「目安箱事件」

中村君が施設で暮らす中で一番人権侵害を感じた事件は「目安箱」と呼ばれる、支援を改善するためのシステムであった。中学1年生位に開始されたこのシステムは2ヵ月に一度、1つのユニットに他のユニットの職員が来て子どもたちの不満を聞き取りする形で行われる。そこで話された記録が自分のユニットの職員に渡され、後で職員の態度が急変して不利益を受けることになった。そ

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

のような秘密の漏洩が彼に不信感を抱かせ、強い怒りの感情を抱かせた。

F 施設で暮らしていて、むかつく事件とか、しんどかったとか、虐待じゃんと思ったこととか、ないですか？

N むかつく事件というか、施設内で子どもの不満を聴こう、ここを改善してほしいみたいなやり方として「目安箱」っていう、聞き取りみたいなのがあったんですけど、別の部屋の職員が子どもに聞き取る、みたいな。

F その部屋の担当じゃなくて別の部屋の担当が聞く、んですね。

N そうですね。始まったばかりの時はそのシステムが理解できていなくて、ぶっちゃけで話をしていたりしてたんですけど、用紙があるんですけど用紙に職員はどんどん書いて行くんですよ。後の紙がどうなるのか気になって、まあ大丈夫でしょう、みたいな。流石に職員に渡したりしないでしょ、みたいに思っていたんですけど、自分の部屋の職員に渡して、愚痴もあるわけですから、子どもが話したことが担当の職員に渡って、その担当の職員から変な態度されるんですよ。なんか本当に筒抜けだったんで、情報が。

F 信用できなくなっちゃう？

N それ知ってからは子ども間にも伝えて、やめたほうがいいよみたいな。さすがにやばかったんで。結構ほかの部屋の職員が言っているっていうカモフラで隠れていたものがぱっと出てきたんで、もう信用ゼロですよ。

F こういうのを聞いちゃったときに信用ゼロだけど、本当に担当の人たちも信じられないし、周りの職員も信じられないじゃないですか。そんな時、どういう気持ちだった？

N 正直殺してやりたかったですよね。小さい頃からずっとなんで。こんな施設ぶっ壊れちまえばいいんだよ、みたいな。ゲームとかの世界に中学生だと入るんで、この爆弾施設に仕掛けたいな、みたいな。子どもだけ避難させて、職員だけ全部爆破したいな、みたいな。施設内に職員寮があって職員寮も爆破した

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

いなみたいな。

プライバシーが施設内で共有されることが利用者にとって無力化の源泉となることは、E.ゴッフマンの前掲書にも語られる⁽⁶⁾。共有された秘密が生活の至るところで突きつけられるからである。支援側の見解からするとそのような情報共有がなされてこそ、トータルな支援が可能になる。そこに利用者と支援者のプライバシーに関する意味づけの違い、温度差が存在している。

④ 「イライラ」の正体は何か

中村君はともかく職員の指示には従わない、ストライキ状態を反抗期には徹底した。ひたすら反抗し職員の指示を無視し、ストレスを他にぶつけた。その「イライラ」の根源は何かを正面から彼に問うてみた。

F むかつきの根源を自分で分析してみるとどんな感じ？

N 強要されるのが嫌なんですよ。自分が部活はいらなかったのもそのせいなんですけど、何しなさいという命令形が嫌いで、人に命令できる立場なのか、じゃあどうして命令できるのか理解できないし、俺に対して言う前に自分はどうなの？ っていう。命令口調がすごく嫌いで。とにかくいや。

それは施設では避けることの出来ない、生活支援としてのあらゆる場面で指示を受けるという日常生活のあり方そのものであった。信頼関係にない職員から命令口調で指示を出されること、その施設生活の構造そのものがストレスの根源として彼を苦しめていた。

そして、それは時に強い言葉の暴力、威嚇として発動されることもあった。(Aはグループホーム施設長Aさん)

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

N やっぱ小さい頃から押し付ける感じの教育だったんで、小さい時に怒る時って大体男の職員なんですよ。強く言って。

F 強く言って、力で。

N そうですね。言葉の威圧で治める感じですね。その時に恐怖心植え付けて、逆らえないようにっていう。

A どんなこと言われたの？ お前何やってんだよ、とか。

N そんな感じですね。言葉の威圧が本当に凄くて。

A スピーチロックですね。ざけんじゃねえよ、とかお前何考えてんだよ、とか。

N 結構よくありますね。言葉の威圧が強くて。

F それは何か事件があった時とか、態度がちょっと反抗的だった時とかにそうなってくるのか、それともいつも威圧的で上からなのか？

N 怒った時が怖いぞみたいなの。

F やっぱ力で抑えるんだ。

中村君に対して、虐待という意味付けを積極的に進めているA施設長のいうスピーチロック (Speech lock) は心理的虐待の一つであり、近年高齢者介護の現場で頻繁に用いられる概念である。身体的拘束をしなくても言葉によって利用者の行動を抑制することであり、人権侵害に当たるとされる。「イライラの根源」の部分は確かにスピーチロックに該当するだろう。しかし、後半部分はより積極的に言葉による威圧、虐待の要素が見られる。

⑤ 爆発するNくんと見せしめ=「公開処刑」

「イライラ」を繰り返して体験した中村君はしばしば爆発するようになった。切れている時は頭の中が真っ白になり、その職員を壊したく感じたという。しかし、彼は職員に対して暴力を振るうことはなく、それはいけないこと、それをしてら負け、ということが強く内面化されていた。彼の爆発の仕方は主とし

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

て部屋に引きこもり、ものを壊すというやり方であった。部屋に引きこもるのは、暴れるのを小さい子たちに見せると怖がられて、孤立を経験するのが嫌だからであった。

小さい頃から年上の入所児がしばしば感情的に爆発して、職員に押さえられるのを見せられて来たが、中村君も一度だけ職員に抑えられ、見せしめにされたことがあるという。

会話1

F うーん。いらいらしちゃうって話がさっきから出ているんだけど、いらいらするときに、たぶん今も暴れちゃう話してただけだけど、そういう時って自分の中でどういうふうになっちゃう時なの？ 混乱しちゃうのか、むかむかしちゃうのか。ともかくわーって感じなのか、どう？

N 爆発した時ですよ。爆発した時は対象にもよるんですけども、職員に対してイラッとして、今まで積もった分があるんだったら、本当に頭真っ白になったりとか、何なのみたいな、ぶっ壊したいみたいな、破壊衝動みたいになって、あーみたいな。

A 破壊したいんだ。それとも関係を壊したいの？

N その人を壊したい。いなくなればいいみたいな感じで。

A ゲームのようにね。

N ですね。でもそこまで、職員に殴ったこともないし、蹴ったこともない。職員に対して殴る蹴るしたら負けじゃね、みたいな。手でしたら負けって言うのが、小さい頃から年上とかに言われて、職員にも言われてたんで、手でしたら負けジャンみたいな。手は出さなかったですけど。

F 手を出したくなるくらいの、感じに切れてることはあった？

A 手を出しそうになったら物に当たる。そうするとなんか、男の職員が3、4人出動して来て、羽交い絞めにされるんですよ。首絞められて、一回。

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

会話2

N 小さい子と上の子を一緒にした理由がそれだと思うんですけど、やっぱり表側は家族、みたいなものをイメージしているわけなんですけれど、たぶん年上を締め付ける、こちらには力があるんだぞ、みたいなことを示す。自分が小学校三四年の時に今の新しい施設になったんですけど、凄かったですね。大きい子が暴れる時に、4、5人職員が来るんで、それで押さえつけたりとか。

F 見せしめ？

N 見せしめですね。公開処刑、って感じですよ。

F 公開処刑か。

N 惨めにさせるっていうか。たぶん年上からしたら惨めな気持ちになるのが一番。

F 年上の子が年下の前で4、5人に抑えられて、恥をかかされるわけだ。

N そうですね。そこで恥かきたくないという風になるんですけど、年下の子からしたら、暴れたらあなる、っていう。

F 暴れたらあなるっていう、顔を潰される？

N そうですね。本当に

A 学習するんだね。無力の学習。無力感の学習。

F そうですね。無力感の学習ですよ。

会話3

N 俺が暴れた時とかも他の子が怖がっちゃうみたいで、俺は他の子と接触しないようにして、他の部屋に行って、なんとか。

F それが中学生の時暴れた時の話で？ 暴れたことって何度位あるの？

N ちょいちょいですね。俺は基本的に抑えられたのは一回だけですね。それ以外は職員が怖いからじゃなくて、他の子が怖がるから、怖くて近寄りたくない存在になるっていうのが怖かったんで、自分は結構、小さい子とか好きだったん

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

で、それはそれで辛いなあ。すぐに部屋にいった。

山本(2011)は臨床心理士の立場で、不適応状態にあり暴れていた子供たちの「語り」を分析しているが、自分の内界に痛みや苦しみを抱え、問題行為を通して何かを訴えているという視点が必要であるという。子供たちの背後に生態学的な場での複雑な相互行為があり、言語化することが難しいため、問題行動として表現せざるを得ない。子どもが置かれている「全体の間」から聴く必要があり、「困った子ども」は「困っている子ども」でもあるという⁽⁷⁾。

中村君も日常的な職員の強制に対して、違和感を抱きつつも上手く言語化できず、あるいは言語化する時間を与えられずに、暴れるという自己表現をするしかなかった「困っている子ども」であったろう。

一方、「公開処刑」はユニットの家族になぞらえられた10人程度の小さい集団で行なわれる。他のユニットから男子職員が3、4人呼び寄せられ、羽交い絞めにされて首をしめられたという。職員の圧倒的な力を見せつけ、小さい子どもたちに、暴れたらあなるといふ恐怖心や無力感を植え付けるとともに、集団の中では年上で兄貴格の存在の顔を潰して降格させる、「降格儀礼」になっている。現在の支援者であるグループホームの支援枠組みから見れば、身体的な虐待であるとともに、精神的な虐待とも言える。

「困っている表現」に対して身体的虐待という対処がなされた、ということがこのエピソードの核であり、支援を進めるうえで問い返されなければならない重要な点であろう。

(4) 反抗期真ただ中の進路選択

中村君は反抗期の真ただ中で進路選択の時期を迎えた。信頼できる職員もいないなかで、彼は進路を自ら選び取っていくことになる。

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

① ふざけ半分のIQテスト

F 私なんかNさんと今話してて、知的障害と言われるほど、苦手なことがありそうに全然思えないんだけど。

N なんだか、わかんないっすね。テストは適当に受けた感じだったんで。ふざけ半分みたいな。

F ふざけ半分みたいな。

N 中学のもう3年時ですよ。なんか木へんを出来るだけ多く書けというやつは2つくらいしか書かなかったりとか、水の傾きみたいな、この傾きだとどのくらいの傾斜になるかみたいなのも、垂直に線引いたりとか。ふざけまくったりして。簡単なテストだなみたいな感じだったんですけど、無駄じゃね、時間勿体ないからささっと終わらせよ、みたいな。

IQテストを受けたがまたそれも、反抗の表現として「ふざけ半分」でなされたものだったという。このIQテストの結果がどのように将来に影響を与えるかというような計算は中村君には全くない。

② 進路決定

具体的な進路決定は中村君が和室に呼び出され、「働くか普通高校進学か」という選択肢をいきなり提示される面談からスタートした。これ以上勉強しろと強制され続けることに嫌気がさしている中村君は即座に「働く」ことを意思表示した。働くことに対する具体的な支援は施設側から用意されておらず、威圧的に外部支援に委ねること、つまり、「ハローワーク」に行くことが指示されたのみだった。施設という閉鎖空間の中で社会経験に乏しく、中学生まで切符さえ買ったことのなかった中村君にとって、それは大きな障壁に感じられた。

中村君はこの後、施設の友人たちから情報収集し、働くことを決めたら即座に施設退所しなくてはならないことを初めて知る。それは18歳に直面するはず

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

だったことを早められることであったし、なにひとつビジョンを持ってない未知の生活に放り出されることを意味した。それは中村君にとって選択の余地のない選択不可能な選択肢であった。

面談は複数回繰り返されたらしく、その間に行ける高校はどこかなどの検討もされたようだが、中村君は中学の同級生か施設の友人たちからの情報により、養護学校の存在を知る。その友人たちも学力面では芳しくはなかったのだろう、養護学校の進学を決めていた。そこで勉強しろと言われたい、強制されることがない学校であるという要素が決め手となり、友人たちが行くということも手伝って中村君は養護学校を望ましい進路先と判断した。

中村君の判断を施設側は歓迎せず、反対した。反対するのみで選択肢として十分な説明がされた様子がない。選択すれば就職等社会的にどのようなコースを辿ることになるのか、なにひとつ施設側、中学側から提示もなく、中村君によればビジョンが描けず「頭が回らない」まま、自己決定として「熱血教師」によって後押しされ、進路が決まって行った。

会話1

F　なんで養護学校になったの？

N　自分、中学三年生の時に進路決める話合いあったんですけど、まあ、聞いた通りなんで反抗期でも勉強もしたくないし、する気ないみたいな状態だったんで、成績はがた落ちして、でまあ、行こうと思えば行けるくらいの高校もあったんですけど、でも俺は行かねえみたいな。他の子が養護学校行くみたいな話を聞いて、それどういう学校なの？　みたいな。へえ、話しきいて、そうなんだみたいな。じゃあ皆行くんだったら、俺もそっち行くわ、みたいな感じで職員に話したんですよ。そしたら和室に呼び出されて、どういう学校なのか分かってるのか、みたいなのがあって、自分は分かっているし話聞いたし、どういう人がいるのかも聞いたしと言ったら、働くか普通の高校行くかどっち

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

か選べ、みたく職員に言われて、え、何で？ 他の人には選択肢あるのに何で俺だけないの？みたいな話してたんですけど、決着つかず。まあ学校の先生に話して、自分は養護学校行きたい、今の自分の学力的に無理でしょうみたいな話したら、学校の先生は結構熱血漢だったんで押し切ってくれて、一応テストも受けてみたいな感じで、養護学校行きました。

F 働くか普通学校行くかみたいな、結構反抗期だった中で進路を決めるんだけど、客観的に聞いてると、もつと丁寧に聞いてくれればいいのにね。

N 働くってなったら、施設出ないといけなくなっちゃう。そのことも知らなくて俺。働く、だったらハローワーク行け、みたいな。脅し的な感じでハローワーク行けと言われてた。ハローワークって、知識もないわけですから、結構閉鎖空間で。本当に病院とか電車とかもみんな職員がやるんで、今までタダなわけですよ。電車の切符の買い方だって、中学になって友達とどっかでかけるまで何も知らなくて。

F へーえ。働くか普通学校行くか、そういう選択をしたらどうなるのかみたいなそういう背景は分からなかった？

N 分からなかったですね。普通校は行けば友達と遊べるみたいな考え方で、仕事するとどうなるのか見えない。普通校行くしか選択肢がない、そうするために、中卒だとどこも雇ってくれないと、すごくぼやぼや言って来て、ぶつぶつ言って来て、それで普通校行くっていうんじゃないの？ みたいなだったんですけどね。自分も嫌だったんで。普通校行ったとしたら、またなんか勉強しろとうるさく言われるし。そっちの学校行けば勉強とかも、ほとんど学力も低いって話を聞いていたんで、勉強しろとは言われないよな、って。何しろと言われなくなるし、そこの施設が高校に受かると何かプレゼントくれるんですけど、養護学校はないよ、みたいな感じだったんで。

会話2

N いざ進路になった時に、どうすんだみたいな。働くか普通高校行くか選べみたいな。じゃ働こうか。じゃハローワーク行こうか。別にいいよみたいな。そうすればいいかと思ったけど、他の子から働いたら施設を出ていかなくはない話を聞いたし、あと養護学校の存在も聞いたから、じゃ、そっちに行くって。

F 養護学校って選択があるわって、養護学校についてはあまり説明してくれなかったの？

N どういうところだか、分かってる？ みたいな。自分なりには理解していたので分かっていると。その先のことを俺は見えていなかったんで。就職とかのことを。

F 養護学校コースになると障害者コースになって、障害者雇用とかで就職になっちゃうということはわからなかった。

N 中学生だし、夢見ちゃうタイプなんで。行ければいいって感じだった。頭が全然回ってなくて。そういう感じで学校さえいければいいやって感じで。そんなこんなで養護学校。やはり中学生とかで就職という明確なビジョン？ 的なものはないですよ。中学の時なんて将来の夢何？ 野球選手、サッカー選手みたいなのが大半。中学の時に就職って選択をしろっていわれても出来るわけじゃないですよ。え、だって高校出てからでしょ、みたいな。

施設側としては手に余る接近困難な中村君に対して、進路の相談を上手く進めることが出来ず、働くか普通高校に行くかという提示をするだけで精一杯だったのかもしれない。腫れものに触るかのように面接が持たれたのだろう。中村君に対して普通高校に進学するということに向けての誘導的な選択肢の提示をした。それが児童養護施設の支援枠組みの中では常識的な進路だったからだ。しかし、中村君が特別支援学校という新たな選択肢を仲間集団から入手し

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

て選択の意志を告げた時に、「障害者として生きる」ことを選択するリスクを知る施設側は強く反対した。反対されると反抗することをアイデンティティとしている中村君はより強く自分の決定を主張し、中学の教師も巻き込んだのでやむなく、自己決定を認めて進学に渋々同意することになった、というのが施設側の物語であろう。

知的障害者はパターンリズムによって機会を制約され、周囲の人との力関係によって抑制され、また取り込める情報を制限するバリアがあるために自己選択が抑制される傾向にあるという⁽⁸⁾。中村君が軽度知的障害なのか、あるいは、そうでないかは疑問が残るものの、施設側はパターンリズムに基づいて十分に選択肢を提示しなかったし、力関係によって誘導もした。そして、おそらくは軽度知的障害があり得られる情報が限られた友人たちからの情報を基に、勉強を強制される生活から逃れたいという希望を主として、自己決定をするに至ったのである。

この後の語りで中村君は、この自己決定を全面的によしとしていた。特別支援学校に行かなければ今よりももっと自分は荒れて、荒れ続けていただろう、という。そして特別支援学校の学びは大変楽しく、そこが家であればよいと思ったという。

自己決定という意味ではその形を取っているもののジレンマが残る。それは自己決定と本人の利益との間のジレンマである⁽⁹⁾。

4 考察

中村君は何故知的障害者として生きることを選んだのか、という最初の問いに立ち戻って全体を振り返ると、中村君の「語り」によれば施設特有の組織構造の中、信頼関係の作れない職員との間で、日常的に精神的・身体的虐待、あるいはグレーゾーンの支援を受け、「イライラ」を感じ日常的継続的にストラ

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

イキを実行した。それが反抗期に至ってエスカレートして「暴れる」なかで、殆ど進路について説明や適切な支援がなされないまま、限られた情報しか手に出来ず、将来に対するはっきりしたビジョンも与えられずに、職員からの虐待的支援を回避するという理由で、より安全な進路である「特別支援学校」を自ら選択した、あるいはする形になったということになる。そしてその自己決定を肯定し、引き受けて現在も生き続けているということである。

この物語は児童養護施設の持つドミナントな物語と異なる。ドミナントな物語は利用者を支援する善意の物語であるため、絶対的な価値を持ち、問い直されることが少なく、時に利用者の生きている体験世界の中で生まれた物語との間でジレンマや葛藤が生じる⁽¹⁰⁾。支援職員はまず中村君を幼少時の被虐待経験から、情緒に障害を持つ青年と理解していただろう。そしてストレス耐性に乏しく、日常的に爆発を繰り返すために接近困難な中、職員の普通学校への進学という誘導にもかかわらず、自分勝手に特別支援学校への進学を決定し、障害者としてのコースを選択した、という物語になるだろう。

山本(2015)は医療人類学者クラインマン(kreinman,1996)⁽¹¹⁾が疾患と病いを異なった意味を持つものとして説明することを引用しながら、その2つが異なる故にジレンマや葛藤を生じさせるが、本来は「疾患」と「病い」双方の視点が補完的にその人全体の支援を形作る基盤となるべきであるという⁽¹²⁾。

中村君の場合も、主として中村くんへの理解を形作って来たであろうドミナント・ストーリーから、支援を形作る基盤となる物語が付け加えられている、あるいは、新たに書き換えられている最中であるという印象が強く残った。

註

- (1) クライアントが語ることによって自らの物語を整理し、語りなおしながら自らのオータナティブ・ストーリーを見出していくという支援である。今回の場合、中村君のイライラ体験に虐待という外在化された枠組みを積極的に導入し、「職員との関係の悪さから反抗していた自分」という物語から、「虐待を受けて当然なこととして

「知的障害者」として生きることを何故選んだのか

怒っていた自分」としてのドミナント・ストーリーの書き換えに向けて介入がなされてきた。荒井浩道(2014)ナラティヴ・ソーシャルワーク, 新泉社。

- (2) ナラティヴではインタビューはインタビューの聞き手が語りの一翼を担っている相互行為のデータである, とされる。佐藤彰他編(2013) ナラティヴ研究の最前線, ひつじ書房, p.7.
- (3) 山本智子(2016)発達障害がある人のナラティヴを聴く, ミネルヴァ書房, p.41.
- (4) このあたりも, 語り直しによる効果が出ており, イライラする場所であるだけでなく楽しかった出来事もあったという意味付けが膨らんできているし, インタビューの中でも広がって来ている。
- (5) E.ゴッフマン(1984)アサイラム—施設被収容者の日常世界, 石黒毅訳, 誠信書房, p.7.
- (6) E.ゴッフマン(1984)前掲書, p.166.
- (7) 山本智子(2011)「子どもの『問題行動』の背景にある『本音』—様々に語り直される『本音』をどう聴くか」, 発達32(127), p.49-56.
- (8) 植戸貴子(2011)「知的障害者の自己選択を巡るジレンマ—ワーカーのジレンマ経験から支援関係を見直す—」, 松岡克尚他編著, 障害者ソーシャルワークへのアプローチ, 明石書店, p.135-159.
- (9) 植戸, 同上, p.149.
- (10) 山本智子(2015)「障害者支援施設(知的)における『当事者支援』への視点—利用者」と施設職員の物語が出会う場所で」, 森岡正芳編著, 臨床ナラティヴアプローチ, ミネルヴァ書房, p.243.
- (11) A.クラインマン(1996)病いの語り—慢性の病をめぐる臨床人類学, 江口重幸他訳, 誠信書房.
- (12) 山本智子(2015)前掲論文, p.243.

謝辞

最後に本論は全面的な中村君の協力とグループホームのA先生の協力の元で可能になった論文であることを記し, 心からの感謝を捧げたい。